



せん こう
閃光

えん こう とう じん
猿猴川にかかる荒神橋に入ったその時、突然空に黄色みがかった光線が2、3秒間漂っていた。(爆心地から約1.8kmの場所)

被爆体験証言者 李 鍾根(イ ジョングン)氏

絵の作者 曾根 沙也佳(そね さやか)氏



爆心地から4.1kmの校庭から見た火の玉

8月6日のよく晴れた朝の学校の校庭、青い空で朝日に輝く飛行機が飛んでいた。私は当時7歳で、飛行機を見ていたその瞬間、ピカッと光り、太陽が落ちたかのように思われた。垣根の向こう側に連なる家々の屋根の上に両手を広げて抱えきれないほどの火の玉がゆれ動いていた。



みんなで死のう、みんな一緒よ！！

己斐本町の自宅にて被爆。「みんなここに集まりなさい！」爆風に飛ばされ意識朦朧の中、母の叫び声を聞いた。家の中はひっくり返し、もうもうとした土煙。ただならぬものを感じた母親は、サッと大きな掛け布団を家族の上に広げながら「みんなで死のう、みんな一緒よ！」と悲壮な声できっぱりと言った。(第二、第三の大型爆弾が来たらとても助からないと思ったのだ。)

布団の中で肩を寄せ合ったあの時の家族のあたたかさ、子供心に感じた家族の絆を今も忘れない。

被爆体験証言者 八幡 照子(やはた てるこ)氏

絵の作者 武原 明歩(たけはら あきほ)氏



お寺を襲った炎の竜巻

河原の土手から私とお父さんがお寺の方を見ると、寺も神社も、イチヨウ、クスノキ等の森が一体になり、火災が竜巻になり、天に吸い込まれていた。二人はその後、河原に戻って、寝転んで休んだ。



暗闇の中で燃える小屋

爆風によって飛ばされ、牛田^{うした}の家の前の道路で数分気を失っていた。しばらくして気が付いたとき周りは真っ暗になっていたが、遠くで納屋の藁^{わら}屋根が燃えていた。「いったいどのくらい気を失っていたのだろう」と思う。



がれきの中から這い出して

爆心地から2kmの広島駅(全焼全滅区域)で両親とともに被爆。父は閃光を見た瞬間、とっさに私を自分の懐に抱きかかえその場に伏せた。

その直後に凄まじい爆風が付近を襲い広島駅舎の屋根や壁面などが父の背中に崩れ落ち、その下敷きになった。しばらくたって気が付き、瓦礫をかき分けて薄明りのする方角に這い出ることができた。

すると、そこに直前まであった周辺の建物はことごとくなくなり、駅や周辺にいた多くの人々も消え失せていた。



水を、水を…と求めて

爆心地から2km(全焼全滅区域)の広島駅で両親とともに被爆。広島駅構内には被爆し全身を焼かれた市民たちが、水を求めて集まってきた。



死体を踏み分けながら逃げる

爆心地から2kmの広島駅(全焼全滅区域)で両親とともに被爆。この絵画は迫ってくる炎から必死で逃れる場面を描いているが、あたりは薄暗く遠くまで見わたすことができなかった。

私は広島駅舎の北側にいたため、強烈な爆風や熱線は堅固な駅舎に遮られ体に大きな被害を受けずに済んだ。周りは全身にひどい傷を受けた人たちで一杯で、比較的の傷の軽かった私は恨めしい目で見られ、いたたまれない気持ちだった。

付近には倒れたまま身動きしない人も多数いたが、メラメラと迫ってくる炎から逃れるためにこのような人々の体の上を逃げていくことになった。苦しむ多くの人々を目の当たりにしながら、誰も救うことのできなかったことを思うと無念さで一杯だ。

被爆体験証言者 原田 浩(はらだ ひろし)氏

絵の作者 土井 紀子(どい きこ)氏



防火用水の中で立ったまま焼かれた被爆者たち

爆心地から近い本川町、相生橋西の電車道の防火用水の中で立ったまま焼け死んだ人たち。水に浸かった膝から下だけは生身だった。(爆心地から4～500mの場所)



潮の引いた河原の惨状

原爆が投下された日の午後2時頃。潮の引いた天満川てんまに焼け焦げた多くの人々や馬、家財道具などが流れてきて、その場で静止している場面。

この様子は天満川だけでなく、広島市内の多くの川で見られた。

被爆体験証言者 大田 金次（おおた かねじ）氏

絵の作者 黒川 奈夏（くろかわ なつ）氏



神社の石段に押し寄せる人々とそれを治療する兵士

神社の石段に押し寄せる被爆者たち。それを治療する兵士。治療とは言うものの、薬もなく、応急処置程度のことさえできない。油のようなものが入ったバケツを持って、火傷に塗ってやっていただけだ。

手前の折り重なって倒れる人々はもう虫の息で、ハエがたかったり、ウジがわいていた。



私が初めて見た被爆者

原爆が投下された後、山手に避難していく時に、生まれて初めて見た死体。私はぎょっと驚き、足が進まなかった。その死体は、性別が分からないほど皮膚がひどく焼けただれて垂れ下がり、全身血まみれになっていて、辺りは血の海のようにになっていた。

担架で運ばれて来て、この坂道に放置されてしまったように、私の目に映った。



正面から迫る負傷者たち

避難した山手で大雨(黒い雨)に遭い、父親が河原に布団を運んでくれている己斐橋^{こい}のたもとに、家族と引き返した。
市内から己斐橋を渡ってどんどん避難してくる負傷者に逆行しながら必死に歩いた。髪は逆立ち、服は剥ぎ取られ、焼けただれた体を引きずって、への字に曲げた両腕の指先にはめくれた皮膚がボロ雑巾のように垂れ下がっていた。
まるで幽霊のような行列が正面から迫ってきた。

被爆体験証言者 八幡 照子 (やはた てるこ) 氏

絵の作者 長沖 純 (ながおき じゅん) 氏



延命地蔵の前で休む真っ黒なおじさん(西国街道にて)

8月6日の夕方、黒い雨が降る中、爆心地から3.5kmの西国街道にて、火傷で体がパンパンに膨らんだおじさんが、お地蔵様がある石段に座って、私に「水をつかあさい(水をください)」と言っていた。



避難する人と力尽きた人

杖をついた祖父、私の手を引く祖母、一歳の弟を背負い四歳の妹の手を引く母の六人が大勢の人に混じって避難した。場所は現在の太田川放水路の川底にあたる荒地。道の両側や荒地には大勢の人が力尽き、座り込んだり、横たわったりしていた。横たわっている人の中には既に息絶えた人もたくさんいた。荒地の一角に横たわっている一人の女性とその横に途方にくれている小さな男の子と女の子の姿が気にかかった。三人はどうなったのだろうか？

被爆体験証言者 川崎 宏明（かわさき ひろあき）氏

絵の作者 小野 美晴（おの みはる）氏



焼けた電車内、逃げる間もなく死んでいった二人の亡骸

十日市町あたりで爆風により脱線し、道路脇で焼けて鉄骨だけになった電車内。座席があった付近に乗客が2人、骨になった状態で並んでいた。(爆心地から5～600mの場所)



逃げてきた被爆した親子

原子爆弾が投下されて人々が逃げていく中、私の家の庭に被爆した親子が走ってきた。お母さんは髪が乱れて必死な様子で、5歳くらいの女の子がそのお母さんのモンペの裾をしっかりと掴^{つか}んでいた。お母さんは赤ちゃんを抱きかかえていたが、顔は紫色で、赤ちゃんは既に死んでいたようだ。



焼け跡からやっと見つけた孫娘を連れ帰るお婆さん － その女の子の膝から下は骨になっていた －

8月7日午後、市役所に行く途中、焼死体がごろごろと転がり、余燼くすぶる中ですれ違った70歳余りのおばあさんが小さな女の子をおんぶしていた。その女の子の膝から下は骨になっていて、焼け跡でやっと見つけた孫娘を連れ帰る途中だったかと推測された。(爆心地から1キロメートル余りの場所)



広島文理大学グラウンドの惨状

原爆投下後の広島文理大学のグラウンドで、被爆した200人ほどの多くの人々が避難しにやってくる。

この絵は、私が全身大火傷を負って「おかーさん」と叫んでいる3歳くらいの子どもを見つけて、手を差し伸べて助けようとしている場面を描いている。

また、床屋のおじさんが、全身の肉が剥がれて骨が見えている自分の娘を見つめている場面や、母親が子どもを抱いたまま亡くなり、生きている子どもは熱くて泣いている場面など、私がグラウンドで見た出来事も描かれている。

被爆体験証言者 新宅 勝文（しんたく かつふみ）氏

絵の作者 和田 はるな（わだ はるな）氏



「遺体収容所」になった二中のグラウンドに並んでいた^{すま}箕巻き状態の遺体

8月8日、広島県立第二中学校を訪ねた時、校舎は倒壊、全焼、跡形もなく、裏門には「遺体収容所」の張り紙があり、校舎は全焼、グラウンドには20体前後の死体が箕巻きで並んでいた。

近所の方が、自宅まで逃げ帰って死亡したり、焼け跡、救護所などで見つけた身内の遺体を、火葬場もないので、取りあえずグラウンドまで運んできたらしい。(爆心地から1.6kmの場所)



合掌する母

1945年8月6日、お父さんは職場から帰って来ず、翌朝、当時3歳だった私は、お母さんと一緒にお父さんを探しに行った。お父さんの職場があった場所は瓦礫の山になっていた。生存が確認された人の名前が、乾パンが入っていたらしい木箱に書かれていたが、そこにお父さんの名前は無く、お母さんは「お父さんはもう死んでしまった」と思い、瓦礫の前で合掌している。

被爆体験証言者 清水 弘士（しみず ひろし）氏

絵の作者 原田 真日瑠（はらだ まひる）氏



ほん だお
翌日、本通り商店街の叔母の家を訪ねる

叔母の家は、本通りで金物店を営んでいた。被爆の翌日、母から叔母の家の様子を見てくるように言われて、本通りの叔母の家あたりに行った。するとあたり一面、未だ残り火が盛んに燃えており、何処に叔母の家があったのかも分からず、道端ではしゃがんでドクロになった人が燃えている有様だった。爆心地から400m位の場所。



むしろ 筵むしろに巻かれた子どもの遺体を担ぐ男性

8月7日または8日の夕方、己斐の紅葉谷こいもみじだにに架かる小さな橋の上で、当時8歳の私は近所の男の子と一緒に遊んでいた。筵むしろに巻いたものを担いで通る男性が来たので、避けて立っていた。

通り過ぎた男性の後ろ姿を何気なく見上げた時、筵の間から紫色になった6～7歳の子供の足のそが覗いていた。隣にいた男の子から「あれは山に(遺体を)焼きに行くんよ」と聞き、衝撃を受けた。



黒焦げの焼死体が寄りかかっていた石灯籠

8月8日の午後、寺の横にあった神社の石灯籠に寄りかかっていた黒焦げ焼死体。近所の人、花屋をしていた人に体形が似ていると話していたが、死体処理の兵士が運んで行った。



両手に瓶を持ち帰りながら見た原爆ドーム

8月10日、叔母から、被爆死した母や叔母の生まれた家がどうなっているか確認してくるよう頼まれて、そこへ行った。その途中、2本のサイダー瓶を拾い、その後原爆ドームを見上げているところ。



放置されたままの黒い死体

当時12歳だった私が自宅の近くで見た光景。防火水槽にもたれかかるように亡くなった真っ黒の人は同じ姿勢のまま、何日も放置されていた。無関心で通り過ぎていく人々は皆「吊ってあげる」という気持ちを無くしていた。



家族の遺体を掘り出す

爆風で家屋が倒壊して、天井の太い材木の下敷きになり祖父母は砕かれて一部は焼けずに残っていた。父が祖父母の白骨化した遺骨を瓦で隠しておいて、数日後、父と母と私で焼けずに残っていた骨の一片、一片を掘り出した。母が私に向かって「これがおじいちゃんの骨だよ」と言っている様子。



家族の火葬

祖父母は爆風によって倒壊した家の下敷きになり亡くなった。

原爆投下から12日後、父が祖父母の白骨化した遺骨を瓦で隠しておいて、父、母、私の三人で掘り起こし、瓦礫がれきを集め、そこで火葬した。



絶望・死にゆく人

8月18日、祖父母の遺体を拾いに行く途中の西新町(現在の土橋町)の焼け跡で、黒く汚れ、絶望して自ら望んで死を待っている人を目撃した。屋根のようにトタンが立てかけられているのは、おそらく見かねた人がそこら辺にころがっていたトタンで即席の屋根を作ってあげたのだろうと思われる。

被爆体験証言者 末岡 昇(すえおか のぼる)氏

絵の作者 是永 千穂(これなが ちほ)氏



払っても寄ってくるハエ、異様な臭いに群がるウジ

真っ黒焦げに焼けたお父さんの看病で、火傷しているところに(湿布代わりに)すりおろしたキュウリをのせていたら、焦げた皮膚がペロッとむけて、ウジ虫がわき、ハエがたかっていた。



負傷者であふれる教室

8月9日、額の傷の治療のため、父親に連れられ己斐国民学校の救護所に行った。通い慣れた校門を入ると、悲鳴ともうめき声ともつかない騒めきで、ごった返していた。父親が受付の長い行列に並んでくれている間、教室に行ってみた。

木造の教室には、大火傷を負った人たちがぎっしり横たわったり、座り込んだりしていた。みんな顔が火脹れで目が開いていなかった。



小学校の体育館でうじ虫を取ってもらっている

被爆後、安芸郡府中町の小学校に收容され、傷口にわいたうじ虫を取ってもらっている場面。



流れ着いた棺代わりの木箱

9月頃、宮島口の小さな砂浜に、いくつもの遺体が入った木箱が流れ着いた。その日のうちにどこからか作業員が集まってきた。組織に訓練された人だが兵隊さんではなかった。そしてその作業員が10人程度で木箱を木の棒にくくりつけて黙々と運んでいた。



忘れられた女学生の遺体

寺町の駅の、覗き込まないと気付かない場所に放置された女学生らしき白骨化した遺体が、戦後2年経った頃になって発見された。周りに居合わせた人々は騒ぎ立てるわけでもなく、ただ呆然と見ているだけだった。



原爆後遺症

原爆投下後の10年間、下痢と腹痛、全身倦怠、鼻血などの原爆後遺症に苦しんだ。眠っていて、知らない間に鼻から出血して枕元が血だらけになった時は、何が起きたのかと自分でも驚いた。

原爆が投下され、人も町も全て燃やされた。原爆投下から多くの年月が過ぎてもなお、人々の体に核の痕跡は残っている。

痛みを伴わない血は、まだ幼い私を不安にさせた。